佳作

「元気のルーティーン」

須山　恵美さん

　月に一回、特別な日がある。それはおじいちゃんが来る日だ。おじいちゃんは毎回、笑顔と一緒に、たくさんのおかしやごはんを持ってきてくれる。そんな日々が何十年も続いたある時だった。

「ピンポーン・・・」

チャイムが鳴った。おじいちゃんはいつも元気よく鳴らすはずなのに・・・なんだか様子がおかしい。扉を開けると深刻そうな顔をしたおじいちゃんが立っていた。でも理由は分からなかった。

　数日後、お母さんが話をしてくれた。おじいちゃんは胃がんになってしまったのだと。だが、幸いなことに、おじいちゃんは毎年人間ドックに行っているので、早期発見だった。きちんと手術を受ければ治る。それを聞いて心配しながらも、私は少しだけホッとした。

　その後、おじいちゃんは精密検査を受け、入院・手術となった。その間、お父さんやお母さんは何度か病院に行った。でも私は一度も会わなかった。きっとおじいちゃんは、私に辛そうな顔や不安な顔を見せたくないのだろうな、と思った。私に出来ることは元気な顔でまた来てくれることを祈るだけだった。

　検査で胃がんが分かってから数カ月経った頃だった。

「ピンポーン！ピンポーン！」

元気よくチャイムが鳴った。この元気なチャイムの鳴らしかたは間違いない。

「おじいちゃんだ！」

開けるといきいきとした表情のおじいちゃんが立っていた。もちろん、いっぱ

いのおかしとごはんを持って。おじいちゃんの手術は無事に成功し、術後も順調に回復したのだ。「人間ドックをきちんと受けていたのがよかったよ」とおじいちゃんは笑顔で話してくれた。

　あれからも、おじいちゃんは毎年欠かさず人間ドックを受けた。きちんと受けているおかげで、健康を維持することができた。私の袴姿やスーツ姿も見ることができた。

　そろそろ、お父さんもおじいちゃんが人間ドックに通い始めた年になる。お父さんにもずっと元気でいてもらいたいから、今年の誕生日に言ってみよう。「人間ドック行って！」と。